

# Toyo Eiwa-The World Commentary

Toyo Eiwa-The World Commentary は、タイムリーに世界情勢を分析し、公共の理解に資するためのプラットフォームです。このコメンタリーは、著者の意見であり、東洋英和女学院大学の意見を反映するものではありません。

お問合せ E-Mail : kokusaiken@toyoeiwa.ac.jp

## 異なる視角から観たワールドカップ

望月 克哉（国際社会学部 教授）

カタールで開催されたサッカー・ワールドカップは、数々の番狂わせで話題を集めたが、試合以外に注目される変化や動きも多々あった。

この大会のために新設されたスタジアムの緑鮮やかなピッチを取り囲むフェンスに、絶えず流れるバナーに目をとめた人も少なくあるまい。たとえば主催者の国際サッカー連盟（FIFA）は「差別しない（No Discrimination）」に加えて「子どもを守ろう（Protect Children）」というメッセージも発していた。スポンサーのロゴが行列する間に「算数を学ぼう（Learn Math）」や「理科を学ぼう（Learn Science）」、さらには「あきらめたら、おしまいだ（impossible is nothing）」などのメッセージが点滅していた。対戦チーム入場時のエスコート・キッズは見慣れた光景ながら、先頭で試合球をピックアップする役割までもとなると、やや演出過剰とも受け取れた。

今大会に日本人を含む合計 6 名の女性審判が招集されたことは注目に値する。グループリーグのコスタリカ対ドイツ戦では、主審と 2 人の副審いずれにも女性が指名され、史上初めて女性主体の審判団が試合を仕切った。日本から選ばれた山下良美氏も、合計 6 試合で、4 名の審判団の中で選手交代などを担当する第 4 審判を務めている。女性審判の活躍は、女子ワールドカップはもとより国際大会でも当たり前のものになりつつある。がっしりした体躯の男子選手たちを、「小柄」な女性審判がニコリともせず裁く様子は、観ていて痛快ですらあった。



© Raul ARBOLEDA/AFP

大会をめぐり人権が議論されたことも忘れてはなるまい。開催国カタールで LGBTQ の人びとが不当に扱われていることを問題視した欧州 8 カ国の出場チームの間では主将が One Love と記された腕章を身につけることにしていた。これを察知した FIFA は罰則を予告して、その阻止を試みた。ドイツ・チームは日本との対戦前の記念撮影で、先発メンバーが右手で口をふさぎ、アピール封じに抗議したとされる。決勝トーナメントでは No Discrimination の腕章が着用されていたものの、これが FIFA のキャンペーンの一環であることは上述のとおりである。

華やかなスタジアムや、その周辺の整備に従事した途上国出身の労働者の中には、不当な処遇を受け、命を落とした者も少なくなかったという。サッカー・ワールドカップをめぐり、開催国や主催者が抱えるさまざまな問題が露呈したことも記憶にとどめておかねばなるまい。